

ミカエルとキリストは同一人物ですか

「ものみの塔」では、人間となる以前のキリストと、天に戻られてからのキリストの呼び名が「ミカエル」であるとされています。

*** 洞 - 2 922 ページ み使いの頭 ***

「頭」と訳される英語の接頭辞 arch は、「主たる」または「第一の」という意味を持っており、み使いの頭、つまり主たるみ使いが一人しかいないことを示唆しています。テサロニケ第一 4 章 16 節はみ使いの頭の卓越性やその職務に伴う権威について述べ、実際には復活させられた主イエス・キリストに関して述べています。

上の言及で示す、ミカエルがキリストであるという根拠とされている聖句が一つだけあります。

「主ご自身が号令とみ使いの頭の声また神のラッパと共に天から下られると、キリストと結ばれて死んでいる者たちが最初によみがえるからです。」(テサロニケ第一 4:16)

「テサロニケ第一 4 章 16 節では、復活後の主イエス・キリストの声がみ使いの頭の声として描写されており、イエスご自身が実際にみ使いの頭であることが示唆されています。

*** 洞 - 2 908 ページ ミカエル ***

この聖句をどう読むと「み使いの頭の声」が「復活後の主イエス・キリストの声」と同一であると断言できるのでしょうか。単に列挙されているからでしょうか。

「しかもイエスは「み使いの頭の声」で語っているのです。」

「イエスは人間として地上にいたときも、幾人かの人を復活させました。その際、ご自身の声で号令を発しました」- 目 02 2/8 17

どういう理由かは分かりませんが、他の残り二つ（「号令」「神のラッパ」）も全部、キリストと同一と理解されているようです。

しかし、テサロニケの聖句は、「天から下る」つまり、歴史上最も重大な時点となる時で、だからこそ、その出陣に三つもの GO サインが出されるワケですが、復活は、「その同じタイミング」行われることを示しているのであって、「復活！」を命令しているわけでも、単に「復活させる目的」で天から下られる分けでもありません。

間違いなく、号令とは命令です。GO サインです。「あなたの敵のただ中で従えてゆけ」。(詩編 110:2) という神の号令と、それに呼応して、み使いの軍勢を代表してその頭が「勝ち鬨(かちどき)の声」を上げているような様子でしょう。

そして「神のラッパ」はキリストが自らラッパを鳴らすということではなく、エホバからの「業の開始」を告げ知らせる目的でみ使いたちが吹き鳴らすラッパであると理解されます。

(啓示 8:6 - 7)「七つのラッパを持つ七人のみ使いがそれを吹く準備をした。そして、第一の者がラッパを吹いた。」

どう考えても、キリストが、なぜが「み使いの頭の声」の声色を使って、自分対する号令を自分でかけながら、しかも同時に自分でラッパを吹きながら、天から下って来る」という説明は、滑稽でしかなく、この聖句とこうした説明が、ミカエルがキリストであることを示す唯一の根拠だということですから、そうした主張は大いに疑問であると言わねばなりません。

テサロニケの聖句は、文脈の内容から言っても、この3つは全て同じ目的を持つもので、「開始の合図」に他なりません。そして、開始の合図と一緒にやって来るという描写には戸惑いを覚えます。

キリストの行動は、その開始の合図があつて初めて出て来るのですから、時間的流れの描写が的確ではありません。この点、新共同訳は分かりやすい訳となっています。

「合図の号令がかかり、大天使の声が聞こえて、神のラッパが鳴り響くと、主御自身が天から降って来られます。」(新共同訳)

結論： この聖句は「み使いの頭ミカエル」=「イエスキリスト」を証明する聖句ではあり得ないということです。

むしろ、キリストとみ使いの頭は別の存在であることをこの聖句は示しているということです。

では、キリストはみ使いの頭ではないということを証明する聖書的根拠があるでしょうか。そもそも、み子イエス・キリストは「み使い」なのでしょう。 という疑問が浮かんで来ました。キリストが「み使い」であるなら、その頭はやはり「み子」意外にはあり得ないと思えるからです。

そして、「み使いの頭」という語は聖書中に単数で表されているので複数はいないということになります。

さてここで注目したいのがヘブライ人への手紙です。

「彼は[神の]栄光の反映、またその存在そのものの厳密な描出であり、その力の言葉によってすべてのものを支えておられます。そして、わたしたちの罪のための浄めを行なった後、高大な所におられる威光の右に座られました。こうして彼はみ使いたちよりも優れた名を受け継ぎ、それだけ彼らに勝る者となりました。」ヘブライ 1:3 - 4

まずここで、復活後のキリストは「み子」はみ使いより高められた存在で、勝った存在だと言うことがわかります。

「たとえば、み使いたちのうちのだれに〔神〕はかつてこう言われたでしょうか。「あなたはわたしの子。わたしは、今日あなたの父となった」。また、「わたしは彼の父となり、彼はわたしの子となるであろう」と。」(ヘブライ 1:5)

(引用聖句 詩編 2:7) …〔神〕はわたしに言われた、「あなたはわたしの子。わたしは、今日、あなたの父となった。」

「しかし、その初子を人の住む地に再び導き入れる際にはこう言われるのです。「そして神のみ使いたちはみな彼を崇拝せよ」。

「また、み使いたちについてはこう言われます。「そして〔神〕はご自分の使いたちを霊とし、自分の公僕たちを火の炎とする」。(ヘブライ 1:6,7)

(引用聖句 詩編 104:4) …ご自分の使いたちを霊とし、ご自分に仕える者たちを、むさぼり食う火とされる方です。^{※注1}

しかしみ子についてはこうです。「神は限りなく永久にあなたの王座、あなたの王国の笏は廉直の笏である。あなたは義を愛し、不法を憎んだ。それゆえに、神、あなたの神は、^{※注2} 歓喜の油をあなたの仲間に勝ってあなたにそそがれた」。(ヘブライ 1:8,9)

(引用聖句詩編 45:6 - 7) 神は定めのない時に至るまで、まさに永久にあなたの王座。あなたの王権の笏は廉直の笏。あなたは義を愛した。そして邪悪を憎む。それゆえに、神、あなたの神は、歓喜の油をあなたの仲間にもましてあなたにそそがれた。

「しかし、み使いたちのうちのだれについて〔神〕はかつてこう言われたでしょうか。「わたしの右に座していなさい。わたしがあなたの敵をあなたの足台として据えるまで」。(ヘブライ 1:13) (引用聖句 詩編 110:1) わたしの主に対するエホバのお告げはこうです。「わたしがあなたの敵をあなたの足台として置くまでは、わたしの右に座していよ」。

これらの聖句は昇天後のイエスにではなく、キリスト前の時代に、預言的に語られているもので、実際、この特別な宣言は人間になる前のみ子に関して告げられているものです。

そしてここが重要な所です。「神はみ使いのうちの誰にも こうしたことは告げていない」。ということは、当然、その頭であるミカエルにもそのように述べたことなど一度もないということです。

み子は万物の創造、実際にみ使いの創造にも与っている者で、「み子とみ使い」は始めから別の存在であり、み使いは「みな公の奉仕のための霊であって、救いを受け継ごうとしている者たちに仕えるために遣わされた者」(ヘブライ 1:14) であり、いわゆる「霊の子たち」が、人間に仕えるために遣わされた時に「使い」となるのです。

※注1 この聖句の表現は非常に分かりにくいですが、詩編 110 編の文脈を見ると、この聖句は神は自然界のもろもろをご自分の意のままにされることを示すための記述です。従って「霊」と訳される同じヘブライ語が 3 節では「風」と訳されているように、ここでも「風」と訳すほうが分かりやすいと思います。(旧約聖書口語訳 風をおのれの使者とし、火と炎をおのれのしもべとされる)

※注2 ここではキリストはみ使いたちと「仲間」であると表現されています

従ってみ子神と同様霊的な存在ではありますが、生まれた時以来「み使い」だったことは一度もありません。(この点の詳細については「13 キリストとはどんな方ですか 神性 崇拝の対象か」をご覧ください)

またキリストの花嫁、つまり地から買い取られて、天においてキリストと共に王また祭司として仕えることになるクリスチャンに対してパウロはその、権威を持つ立場に就くことに関してこう表現しています。

あなた方は、わたしたちがみ使いを裁くようになることを知らないのですか (コリ第一 6:3)

もしキリストが「み使い」の一人であれば彼らはキリストを裁く立場になるということになってしまいます。それはありえない事ですから、キリストがみ使いの頭という説明が間違いであることはこのことによっても証明されます。

これで、「み子」はみ使いではなく、当然その頭でもなく「ミカエル」なる霊者はみ使いの頭なのであり、一人(単数)存在することが明らかになりました。

さて、そうなりますと、ミカエルに関する次の記述を改めて考慮し直す必要が出て来ます。
「そして、その時に、あなたの民の子らのために立つ大いなる君ミカエルが立ち上がる。そして、国民が生じて以来その時まで臨んだことのない苦難の時が必ず臨む。… (ダニエル 12:1) …

この聖句が示しているのは間違いなく、啓示の書の中で、ミカエルがサタンに戦いをしかけ、天から放逐する事に言及していると言えるでしょう。そして福音書の記述での同様の記述はつぎの聖句でしょう。

「その時、世の初めから今に至るまで起きたことがなく、いいえ、二度と起きないような大患難があるからです。」(マタイ 24:21)

この時点で立ち上がる、つまり行動を起こすのは、ミカエルであって、キリストはまだ王として臨在してはおらず、「あなたの臨在」が近づいたしるしが成就した時点であることが分かります。そして、いよいよその大患難のすぐ後です。

「それらの日の患難のすぐ後に、太陽は暗くなり、月はその光を放たず、星は天から落ち、天のもろもろの力は揺り動かされるでしょう。またその時、人の子のしるしが天に現われます。そしてその時、地のすべての部族は嘆きのあまり身を打ちたたき、彼らは、人の子が力と大いなる栄光を伴い、天の雲に乗って来るのを見るでしょう。(マタイ 24:29 - 31)

この時点で人の子み子イエス・キリストは王国の王としてラッパと合図によってみ使いの軍勢を従えて天から降り、臨在が開始されることとなります。